

泉山（いずみやま）磁石場

地元の言い伝えによると、泉山磁石場は 1600 年代の最初の数十年間に朝鮮人陶工・金ヶ江三兵衛（かながえさんべえ）（1655 年没）によって発見されたと言われている。三兵衛が発見したのは磁石（じせき）というセリサイト、石英、カオリナイトが多く含まれている石である。カオリナイトはアルミノケイ酸塩粘土で、磁器に欠かせない成分である。また、泉山の磁石にはセリサイトと呼ばれる細かい粒の雲母の集合体が含まれており、このセリサイトが粉石を粘土のように結合させている。この泉山で採れる磁石は質が高く量も豊富であったことから、日本で初めての磁器の大量生産が可能になった。

泉山は 1980 年に国の史跡に指定され、1995 年まで採石場として活発に使われていた。現在も 2 つの採掘坑の内部では、採掘道具でつけられた跡を今も見ることができる。1850 年代に日本が外国との貿易に開放されたにも関わらず、1900 年代に入り西洋の技術が導入されるまでは、採石作業は人の手で行われていた。当時の採石場の運営状況や労働者の生活を記した記録は多く残っているが、実際に磁石を採石する過程を記した記録はほとんどない。わずかに残った資料のひとつに、1830 年代から 1850 年代にかけて製作された大皿には、手作業による磁石の切り出しなど有田焼の伝統的な生産工程を描いた大皿がある。皿の現物は有田陶磁美術館に収蔵されており、それを大きく再現したものが、切り出しに使われた道具と共に有田町歴史民俗資料館に展示されている。